

努力する人間になつてはいけぬ

学校と仕事と社会の新人論

著者菅田宏直に最初に会ったのは筆者が30過ぎておめおめと早稲田の大学院に入学した時。デリダの『声と現象』を読んでいた故高橋允昭のゼミで強烈な異彩を放っていた。当時30台前半の院生でありながら黄色のボルシェで息子さんの送り迎えをし、酒は一滴も飲めず、傲岸にしてしかし抜群に出来た。筆者が遅い留学を終えてフランスから帰国した時、菅田はIT系の専門学校の校長になり文科省の審議会の委員を務めるようになっていた。三度目



四六判・496頁・2940円
ロゼッタストーン
978-4-947767-12-7

い。すでにここに至るまでに我々は彼の日常的なエピソードを交えた入念な「コア・カリキュラム」によって、その晦渋な哲学を完全に理解できるような境位に訓練されているのだ。

東北大震災を契機に歌われた森進一の「港町ブルース」の歌詞にある気仙沼。その歌は彼岸からの「意味」の到来であり、三〇年前の新人時代から変わらざる反復され続けてきたその歌は「それ自体でとれただけ大変なパワーを保持しているか」。

学校・大学が「最初のもの（アルケー）」がもつみずみずしいものを「制度や社会が強い」「制約に打ち勝って」「やむを得ずそれを「反復する」という本来の在り方に戻すためには、教師も、あるいは企業の経営者も、「新人」と同様、時間を歪ませるその「最初のもの」の立ち上がり立ち戻るパワーにエネルギーを維持しなければならぬ。ハイデガーすら超克せんとする気宇をもつ菅田哲学の「序章」――と筆者は固く信じている――がなぜ教育論・ツイッター論として書かれなければならなかったのか？

教育実践を支えるエネルギー

すれっからしの大人 こそ熟読すべき書物

大野 英士

彼が存在を意識したのは3年前ツイッターを始めた時。論難者を「アホ」の一言で切り返し、議論を進めるうちに自分の手の内に誘い込み有無を言わず「折伏」するツイッター論壇無双の論客として。しかも今

度には東海大教授の肩書きを手にしていた。本書で「うさん臭い出世をする人の特徴」という節の題名を見た時は思わず吹き出しそうになった。

しかし、『努力する人間になつてはいけぬ』という一見するとそこらのノウハウ本と見紛う題名に騙されてはいけぬ。本書はち

よって広まった個性主義教育、生徒や学生の自主性に任せるという教育は一見するともっともらしく聞こえる。しかしその個性・意欲主義教育は教育の現場で全く機能せず、逆に格差を広げているところか、学ぶ意欲すら奪っている。なぜか？

マンの「教育バウチャー論」がもとだが、それは成人向けの生涯教育だから機能する発想で、学校教育の発想ではない。だから教育者によって練られた「コアな」カリキュラムによって行われるべき本来の学力養成を押しつけて、「コミュニケーション能力」など学校で教えられるわけでもない曖昧な能力を、怪しげな企業人

菅田はこの近代の宿痾ともいふべき機能主義の瀰漫をアリストテレス、ヘーゲル、ハイデガーの時間論を踏まえて徹底的に批判するのだ。ここでは用語も思考の運びも、菅田本来の容赦のない哲学的思弁が展開される。しかし怖れることはな

しかし菅田のこの本はそれで終わりではない。この書物の白眉でありこうした実践を支える哲学が開示されるのは、第九章「ツイッター微分論」と題された「機能主義批判」においてである。「個性」を、あるいは個人の「自主性」を強調する教育の背後に、菅田は、パブロフの条件反射に起源をもち、サイバネティクスや、行動主義などに通底する悪しき思考様式がある